

玉ノ井遺跡第 14 次発掘調査報告書

2025

名古屋市教育委員会

例 言

- 1 本書は、愛知県名古屋市熱田区玉の井町に所在する玉ノ井遺跡^{たまのい}の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は日本基督教団熱田教会の新会堂新築工事に伴うもので、日本基督教団熱田教会からの依頼をうけて名古屋市教育委員会文化財保護課が実施した。
- 3 調査概要は以下の通りである。
調査期間 令和 6(2024) 年 9 月 17 日～9 月 27 日
調査位置 名古屋市熱田区玉の井町 920 番の一部
調査面積 70m²
調査担当者 樋田泰之・林田愛美
- 4 調査の実施および本書の作成に当たっては以下の関係者、関係機関に協力頂いた。
伊藤正人・新美倫子・橋本技術株式会社(順不同・敬称略)
- 5 本書の編集は樋田泰之(名古屋市教育委員会文化財保護課学芸員)がおこなった。
- 6 調査に関する事務及び現地調査は、名古屋市教育委員会文化財保護課が担当した。
- 7 調査の記録や遺物の整理は、調査担当者の他、文化財保護課・名古屋市博物館学芸員諸氏の助言・協力を得た。
なお、弥生～古墳時代の土器・土師器の時期比定等については村木誠氏(名古屋市博物館)から教示頂いた。

凡 例

- 1 調査記録の方位及び座標は、国土交通省告示に定められた国土座標の平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、世界測地系(測地成果 2011)にて表記している。メートル(m)単位での表記を基本とする。
- 2 標高は全て T.P.(東京湾平均海面高度)による。(T.P.+1.412=N.P.(名古屋港基準面))
- 3 土層の土色に関しては『新版標準土色帖』(2021 年版 日本色研事業株式会社)を用いた。
- 4 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示している。
- 5 調査記録・出土遺物については名古屋市教育委員会が保管している。
- 6 遺構の表記に関するものについては、下記文献を参考にした。

文化庁文化財部記念物課『定本 発掘調査のてびき』2016 同成社

目 次

第 1 章 位置と環境	3	図 3 玉ノ井遺跡の過去の調査区	6
第 1 節 遺跡の立地・地理的環境	3	図 4 第 14 次調査平面図	8
第 2 節 周辺の遺跡・歴史的環境	3	図 5 北壁・東壁壁面図	10
第 3 節 過去の調査	5	図 6 SI10 断面図・その他断面図	11
第 2 章 調査の経緯と経過	6	図 7 SI20 断面図	12
第 1 節 調査に至る経緯と経過	6		
第 3 章 調査の方法と成果	7	挿 表	
第 1 節 調査概要	7	表 1 玉ノ井遺跡調査一覧表	5
第 2 節 遺構と遺物	7	表 2 第 14 次調査遺構一覧表	9

挿 図

図 版

図 1 玉ノ井遺跡の位置	3	遺構	14
図 2 玉ノ井遺跡周辺の地形図	4	遺物	15

《参考文献》

- 竹村恵二・岡田篤正ほか 1997「第 2 章 名古屋の地盤ができるまで 第 3 節 名古屋の地下の様子と地層のひろがり 1 濃尾平野下の堆積物」『新修 名古屋市史 第八巻自然編』名古屋市
- 海津正倫 1997「第 2 章 名古屋の地盤ができるまで 第 4 節 旧石器時代の自然環境 1 最終間氷期から最終氷期へ」『新修 名古屋市史 第八巻自然編』名古屋市
- 海津正倫・森勇一 1997「第 3 章 縄文～歴史時代の名古屋の自然 第 1 節 縄文時代 - 縄文海進と内湾の拡大 3 縄文時代後半の環境変化」『新修 名古屋市史 第八巻自然編』名古屋市
- 新修名古屋市史資料編集委員会編 2008『新修名古屋市史 資料編 考古 1』名古屋市
- 新修名古屋市史資料編集委員会編 2013『新修名古屋市史 資料編 考古 2』名古屋市

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の立地・地理的環境

名古屋市熱田区に所在する玉ノ井遺跡は、名古屋台地の西側部分を構成する熱田台地上に位置する。

熱田台地は北端の名古屋城から南端の熱田神宮まで南北全長約15km程度長く伸びており、本遺跡は熱田神宮の北方約300mに位置する。熱田台地は、最終間氷期(12～13万年前)の堆積物から構成され、構成する地層は熱田層とよぶ。上位より浅海～三角州あるいは河床性堆積物で形成された砂層、海進に伴う海成粘土層、最下部の砂層となる。

立地環境を見ると本遺跡周辺の標高はT.P.7～10mであり、なかでも本調査地点や3次調査地点がピークにあたり、東西に向けて傾斜している。西約500mには江戸時代に名古屋城築城の用途で開削された堀川が南北に流れるが、堀川の右岸(西岸)はT.P.0.5～3m程度、北東約300mには、現在、熱田警察署・中部電力パワーグリッド熱田営業所などがあり、T.P.2.6m前後である。いずれも一段低位の谷底平野(氾濫平野)に位置しており、中世以前は海が入り込む立地であったと推定される。

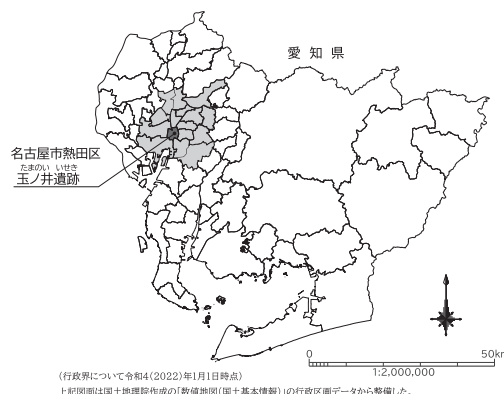


図1 玉ノ井遺跡の位置

第2節 周辺の遺跡・歴史的環境

玉ノ井遺跡の北方約100mには弥生時代の集落遺跡である高蔵遺跡^{たかくら}、西側には古墳時代後期の大型前方後円墳である断夫山古墳^{だんぶさん}、東側は弥生時代～中世の遺物散布地である森後町遺跡^{もりごちょう}が連なっている。また、南側の熱田神宮にも同じく弥生時代～中世の遺物散布地である熱田神宮内遺跡が所在する。

本遺跡はもともと弥生～中世の埋蔵文化財包蔵地(遺物散布地＝土器や石器などを包含している土地)として扱われてきたが、近年の調査によって縄文時代晩期、弥生時代～古墳時代、古代、中世の遺構・遺物が相次いで確認されている。

縄文時代は気候の温暖化が進んだのは草創期～前期で、海水準の上昇が約7,300年前にピークとなり、現在と比較して2～3m水面が上昇していたと考えられる。この気候変動を「縄文海進」ともよぶ。その後、一転して前期末～中期初頭に寒冷化し、「縄文中期の小海退」とよばれる。海岸線も後退し、集落規模・遺跡数も少なくなる時期である。その後、中期前葉から後葉の温暖化、中期末～後期初頭の寒冷化を経て、後期より再度温暖化する。後期～晩期の海水準はピーク時より下がったものの現在よりわずかばかり内陸に入っている。

本遺跡では晩期の土坑墓・土器棺墓・竪穴建物が確認されており、土坑墓・土器棺墓からは人骨が少なくとも17体確認されている(第3次・第8次)。また晩期の土偶も確認されている(第12次・第13次)。後期～晩期の遺跡としては、本遺跡とはやや距離があるが、南東3.5kmに大曲輪遺跡^{おおぐるわ}・下内田貝塚^{しもうちだ}が知られる。大曲輪遺跡では、同様に晩期の多数の土器棺墓や竪穴建物が確認されており、少なくとも人骨が4体確認されている。

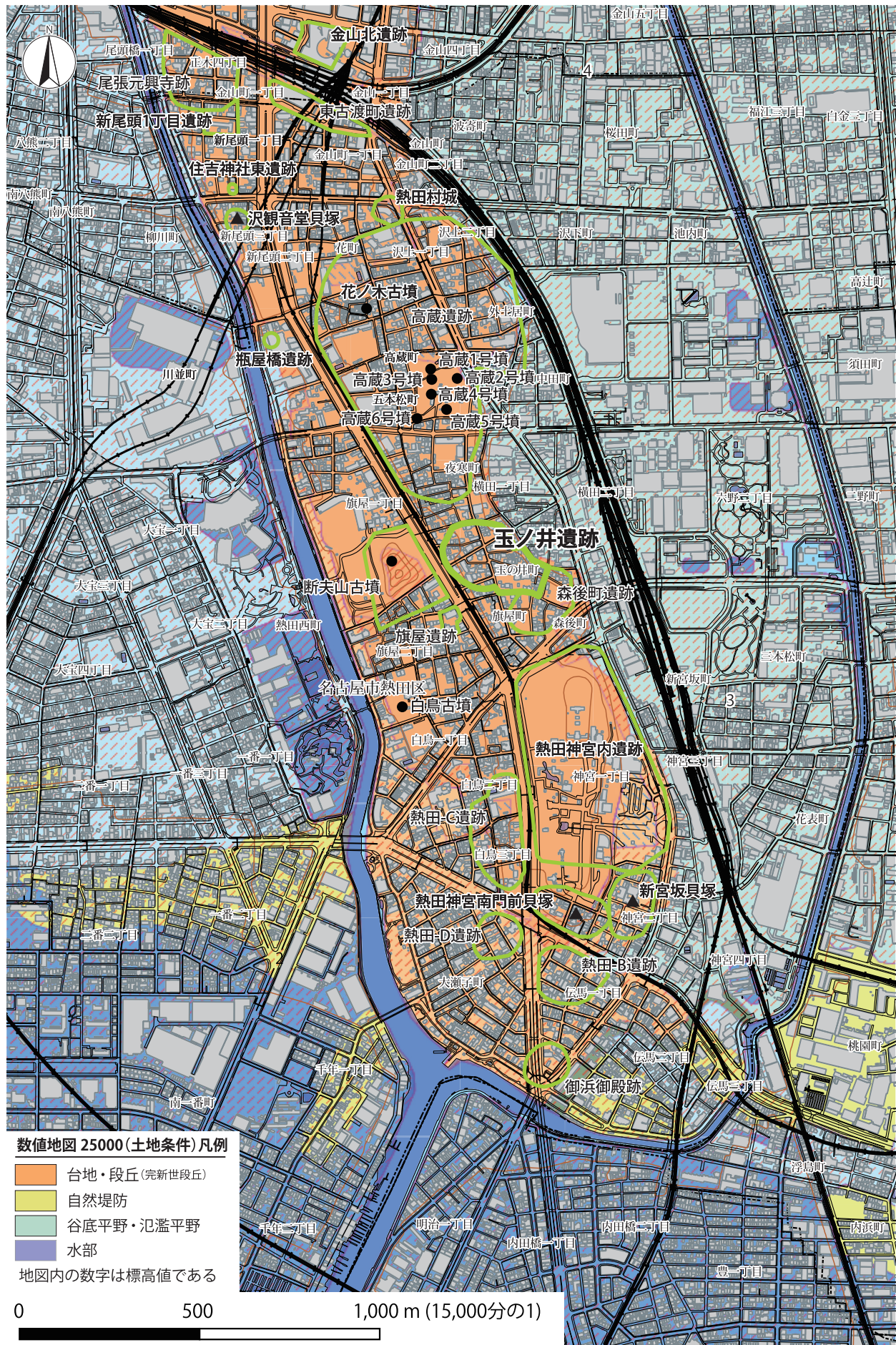


図2 玉ノ井遺跡周辺の地形図

ベースマップは国土地理院『基盤地図情報 基本項目』(2025年1月1日時点)、国土地理院『地理院タイル 数値地図25000(土地条件)』(2025年1月1日時点)を使用し、オープンソースソフト QGIS(ver3.28.15)で編集・出力した。

弥生時代に入ると伊勢湾周辺ではさらに海水面が後退し、沖積地上の微高地や台地端に集落が形成されるようになる。尾張地域では北部九州から伝播した遠賀川系土器が主体となり、三河地域より東は縄文土器の系譜が残る条痕文系土器が主体であり、玉ノ井遺跡はこの両者の混交する地点に位置する。中期後葉の高蔵期になると瀬戸内・畿内の影響を受けた凹線文土器が広がり、台地や丘陵上で遺跡が複数形成される。本遺跡でも丘陵端で竪穴建物が作られるなど集落の形成が始まる。高蔵遺跡で環濠を伴う集落が形成されるのもこの時期である。後期の山中期に入ると、遺跡数も増加し、尾張地方を中心に華やかな文様の土器が多く作られ、パレススタイル土器と呼ばれる赤く彩られた土器もみられる。方形周溝墓が築造されるのもこの時期に多くなる。終末期～古墳時代初頭の廻間期になると、S字状口縁台付甕などの尾張地方独自の土器も見られるようになる。

古墳時代に入ると、本遺跡では竪穴建物（第5次・第7次）が確認されているほか、円筒埴輪（第1次・第3次）・朝顔形埴輪（第1次）が確認されている。

その後、本遺跡では古代の竪穴建物（第10次・第3次）、古代～中世の掘立柱建物跡（第9次）、中世の溝（第1次・第3次・第11次）、土坑墓（2005 民間調査）、近世の地下室遺構（第11次）が確認されているが、規模・量ともに遺跡の主要な時期は縄文時代晩期、弥生時代～古墳時代と考えられる。

第3節 過去の調査

本遺跡は、戦前より知られていたようであるが、特に2000年代以降の近年になっての開発行為に伴い、遺跡の概要が判明してきた。現在までに名古屋市教育委員会主体で12回、民間調査会社で2回の計14回の発掘調査が行われているほか、立会調査・確認調査なども複数回実施されている。

過去の発掘調査の内容については、下記の表に記した既刊の報告書を参考されたい。

表1 玉ノ井遺跡調査一覧表

調査年次	調査次	面積 (m ²)	調査主体	報告書
1994	1次	300	名古屋市教育委員会	尾野善裕・竹内宇哲ほか1995『石神遺跡・玉ノ井遺跡・高蔵遺跡（第7次）発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
2000	2次	50	名古屋市教育委員会	水野裕之2001「玉ノ井遺跡第2次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書37 高蔵遺跡（第26次～30次）玉ノ井遺跡（第2次）』名古屋市文化財調査報告50 名古屋市教育委員会
2002	3次	228	名古屋市教育委員会	伊藤厚史・額綱茂ほか2003「玉ノ井遺跡第3次」『埋蔵文化財調査報告書44 玉ノ井遺跡（第3・4次）』名古屋市文化財調査報告58 名古屋市教育委員会
2002	4次	80	名古屋市教育委員会	額綱茂2003「玉ノ井遺跡第4次」『埋蔵文化財調査報告書44 玉ノ井遺跡（第3・4次）』名古屋市文化財調査報告58 名古屋市教育委員会
2005	-	366	株式会社二友組	高木祐志2006『玉ノ井遺跡発掘調査報告書—平成17年度宅地造成に伴う発掘調査報告書—』株式会社二友組
2007	5次	78	名古屋市教育委員会	市澤泰峰2008「玉ノ井遺跡（第5次）」『埋蔵文化財調査報告書58 白鳥1号墳・白鳥8号墳 正木町遺跡（第21次）玉ノ井遺跡（第5次）』名古屋市文化財調査報告74 名古屋市教育委員会
2010	6次	30	名古屋市教育委員会	長崎千明・野澤則幸2012「玉ノ井遺跡（第6次）」『埋蔵文化財調査報告書66 高蔵遺跡（第57次）玉ノ井遺跡（第6次・第8次～第10次）楠町遺跡』名古屋市文化財調査報告83 名古屋市教育委員会
2010	7次	750	名古屋市教育委員会	野澤則幸・水野裕之ほか2010『玉ノ井遺跡第7次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
2010	8次	50	名古屋市教育委員会	水野裕之・額綱茂ほか2012「玉ノ井遺跡（第8次）」『埋蔵文化財調査報告書66 高蔵遺跡（第57次）玉ノ井遺跡（第6次・第8次～第10次）楠町遺跡』名古屋市文化財調査報告83 名古屋市教育委員会
2011	9次	140	名古屋市教育委員会	長崎千明2012「玉ノ井遺跡（第9次）」『埋蔵文化財調査報告書66 高蔵遺跡（第57次）玉ノ井遺跡（第6次・第8次～第10次）楠町遺跡』名古屋市文化財調査報告83 名古屋市教育委員会
2011	10次	75	名古屋市教育委員会	伊藤厚史・藤根久ほか2012「玉ノ井遺跡（第10次）」『埋蔵文化財調査報告書66 高蔵遺跡（第57次）玉ノ井遺跡（第6次・第8次～第10次）楠町遺跡』名古屋市文化財調査報告83 名古屋市教育委員会
2014	11次	70	名古屋市教育委員会	水野裕之2015「玉ノ井遺跡（第11次）」『埋蔵文化財調査報告書73 千音寺遺跡（第6次・第7次）高蔵遺跡（第59次）玉ノ井遺跡（第11次）桜本町遺跡（第5次）』名古屋市文化財調査報告90 名古屋市教育委員会
2015	12次	60	名古屋市教育委員会	野澤則幸・伊藤正人2016『埋蔵文化財調査報告書74 玉ノ井遺跡（第12次）』名古屋市文化財調査報告91 名古屋市教育委員会
2016	13次	33	ナカシャクリエイテブ株式会社	後藤太一2016『名古屋市熱田区 玉ノ井遺跡第13次発掘調査報告書』ナカシャクリエイテブ株式会社
2024	14次	70	名古屋市教育委員会	本書

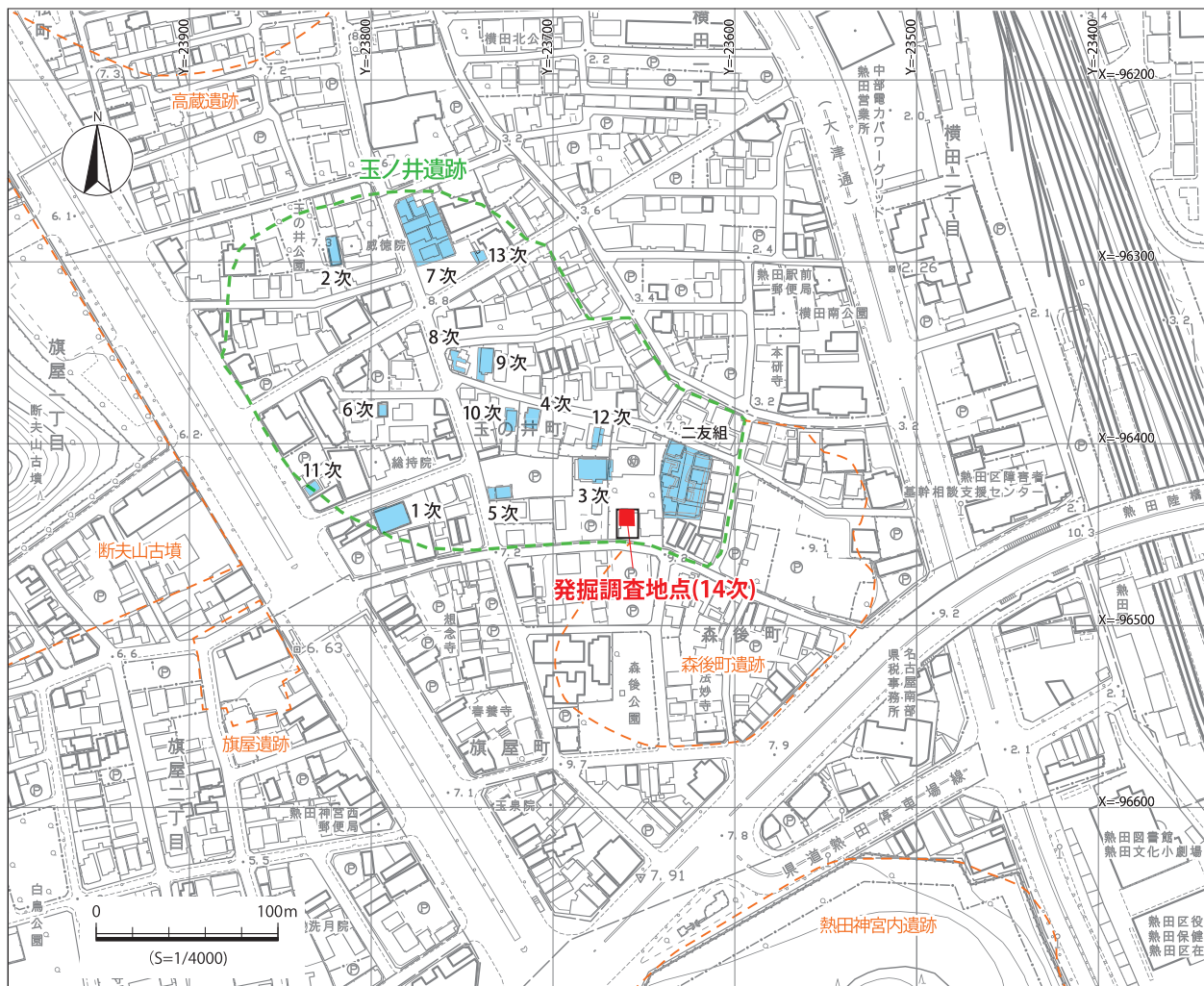


図3 玉ノ井遺跡の過去の調査区

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

今回の第14次調査は、日本基督教団熱田教会の新会堂の新築工事に伴い滅失する埋蔵文化財を記録保存するために実施した。調査地点は熱田区玉の井町 920 番である。

工事主体者・土地所有者から既設建物の解体に伴い、令和6(2024)年2月8日付けで文化財保護法第93条の届出がなされ、令和6年2月22日付け5教文4-344号で工事立会が必要と通知した。その後、名古屋市教育委員会は遺跡の残存状況の確認のため、解体工事に伴う立会調査を令和6年8月8日に実施した。立会調査では、敷地内の2か所で土層の堆積状況を確認した。北側地点では、表土(盛土)がG.L.-0.4mまでみられ、厚さ0.2mの遺物包含層と基盤層が確認された。また、南側の道路に面している部分については既存建物の地下室が設置されていた影響もあり、滅失していると判断された。

この調査結果と令和6年6月3日付けで追加で提出された新築建物工事の届出内容から、工事が埋蔵文化財に与える影響は大きいと判断し、令和6年9月6日付け6教文384号で発掘調査が必要と通知した。協議、事務手続き等を経て、現地調査は令和6年9月17日から着手し、27日に終了した。

また、確認調査後の協議では、新規建物部分の中央部分を現地調査対応とし、中央部分の両端に当たる

東西0.5m幅部分については、東側の既存建物や仮設フェンスとの離隔をとる必要性があったため、後日、本体工事の進捗に合わせて、立会による小規模調査にて対応することとし、西側については10月25日、東側については12月25日にそれぞれ対応をおこなった。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査概要

第14次調査の対象面積は70m²である。調査区および排土置き場が狭小であったが、南側の既存建物の元地下室跡部分が調査区より1m強削平された状態であったため、排土置き場に設定した。施工時は、排土流出防止の目的からトンパックに排土を詰めて10袋程であった。また、調査前は既存建物の解体作業中に表土が全体的に数10cm程削られた状態であり、北から南にやや傾斜している地形であった。調査前に現地踏査をおこなったところ、石鏃1点のほか、縄文土器、土師器、須恵器が散布しており、表採遺物として小型のチャック袋1袋分回収できた。

調査準備として、9月11日に付近の既知の4級基準点(熱田5工区09-06-101、09-06-102)を使用して基準点測量をおこない、調査区内外に3つの新規基準点を設定したのち、水準点測量も高さを持つ基準点(09-06-101:H=7.515)を使用して、設定した基準点に高さを与えた。同日、建築予定図面を基にして調査区の四隅の座標をCADで求めたのち、逆打ち測量にて調査区を設定した。

17日に表土掘削、18・19日に遺構検出、20、24～26日に遺構掘削、27日に完掘写真撮影をおこなった。図面記録は21日に壁面図、27日に平面図を作成した。遺構の検出作業は地山面を中心に実施した。

第2節 遺構と遺物

遺構の確認面は、基盤層である熱田層上面で設定し、表土は0.1～0.2m前後、遺物包含層は0.2～0.3m前後、遺構の確認面の標高は北東でT.P.10.0mで南西に向かって緩やかに傾斜し、中央やや西寄りではT.P.9.8m、西側・南側は削平されている。

遺構については図4・表2で示した。紙幅の都合上、主な遺構として、縄文時代の土坑(SK06)、古墳時代の竪穴建物跡(SI10・SI20)と円窓付台付壺が埋納された土坑(SK62)についてのみ述べる。

出土した主な遺物は縄文土器、弥生土器・土師器、須恵器、山茶碗、近世陶磁器、石製品(石剣、石鏃、石製模造品)であり、27リットルのコンテナケース20箱程度である。

SK06 調査区北東部で確認され、調査区外北側へ続く土坑。この土坑周辺の遺物包含層にも縄文土器が多く集中している。縄文土器の時期は、晩期初頭の元刈谷式～稻荷山式である。器種は深鉢が多く、条痕文、竹管文の調整が目立つ。口縁部も一定数含まれるが、やはり体部が大半である。底部も数点確認した。また、東北地方の大洞BC～C1式の影響を受けたと考えられる口頸部に三叉文を施されたものもある。

他にも縄文土器が含まれる遺構が確認されているが、散在的かつ出土量も少なく、明確に縄文時代の遺構と断定可能なものは皆無である。弥生時代以降の活動により、削平されている可能性が高い。

土器以外に、下呂石製の石鏃が1点確認されたほか、埋土の上部で動物骨を、埋土の下部で貝殻を確

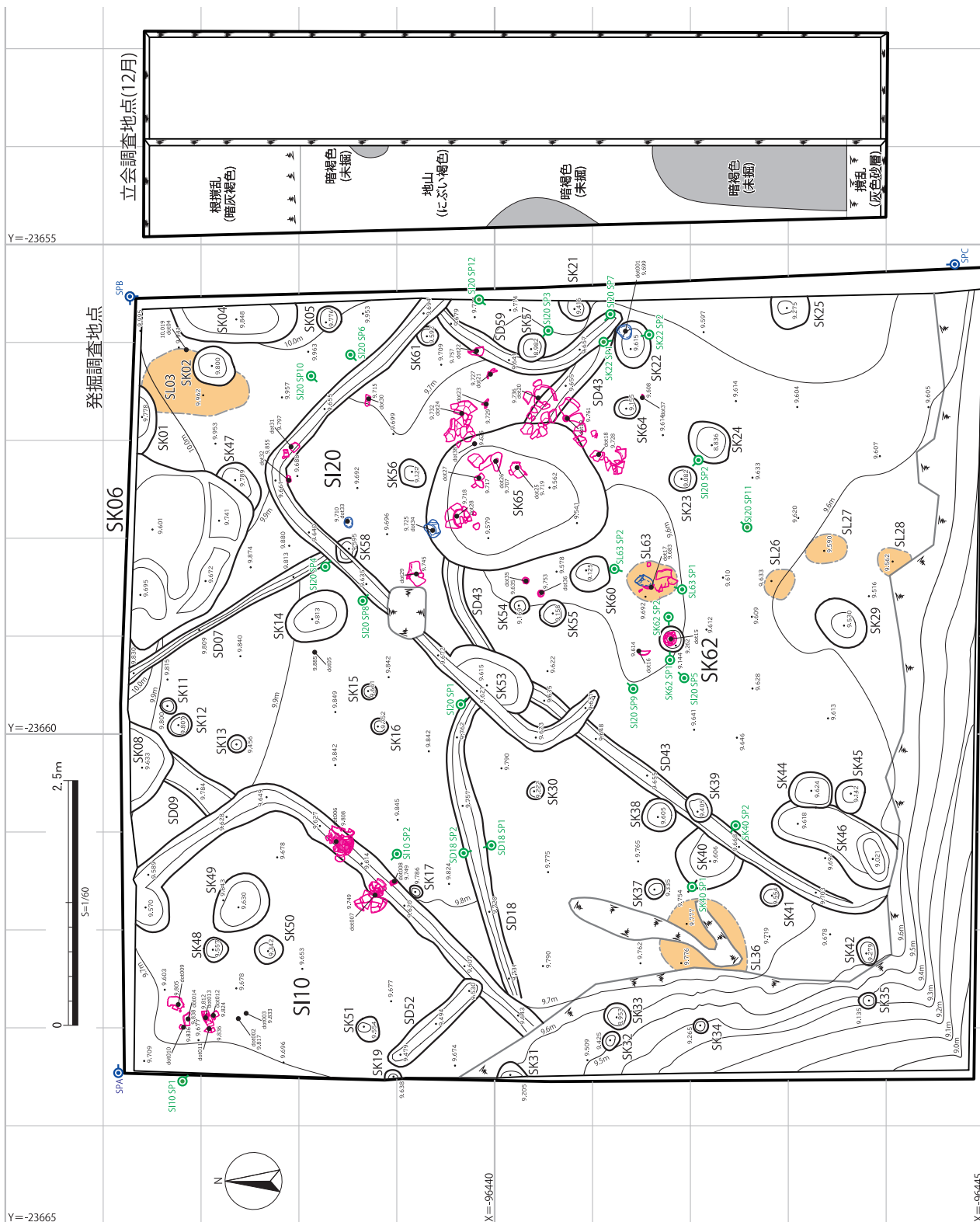


図4 第14次調査平面図



東壁写真(西から)

表2 第14次調査遺構一覧表

遺構名	法量 (m)			平面形	断面形	埋土	主要遺物	備考
	長さ	幅	深さ					
SK01	0.64	(0.26)	0.34	長円	U字	黒褐色	-	
SK02	0.44	0.38	0.13	円	U字	暗褐色+焼土ブロック 10%	土師器	
SL03	1.15	0.94	0.03	長円	逆U字	焼土 (橙色)	土師器 (上面)	
SK04	1.15	(0.46)	0.1	長円	皿	褐灰色	-	
SK05	0.27	0.24	0.17	円	U字	暗褐色	土師器	
SK06	(2.00)	(1.3)	0.5	隅丸方	U字	北壁参照	縄文土器、石鏃、動物骨、魚骨、貝類	
SD07	(2.37)	0.16	0.2	-	皿状	北壁参照	土師器	
SK08	(0.9)	(0.46)	0.22	隅丸方	逆台	北壁参照	-	
SD09	(0.75)	0.3	0.05	-	U字	灰黄褐色+地山ブロック 5%	土師器	
SI10	(3.72)	(3.3)	0.3	-	-	北壁参照	土師器 (赤彩含む)、須恵器、縄文土器	
SI10 壁溝	5.42	0.2	0.2	-	U字	褐灰色	-	
SK11	0.15	0.15	0.04	円	逆台	灰黄褐色	-	
SK12	0.22	0.21	0.04	円	U字	灰黄褐色	-	
SK13	0.19	0.16	0.39	円	U字	灰黄褐色	土師器	
SK14	0.6	0.45	0.05	楕円	U字	灰黄褐色	-	
SK15	0.15	0.15	0.18	円	-	灰黄褐色	土師器、須恵器	
SK16	0.15	0.14	0.1	円	U字	灰黄褐色	-	
SK17	0.13	0.11	0.07	楕円	U字	灰黄褐色	-	
SD18	(3.04)	0.23	0.12	-	U字	褐灰色	土師器、不明土製品?	
SK19	0.18	(0.14)	0.11	円	U字	暗褐色	-	
SI20	4.2	(3.4)	0.3	-	-	東壁参照	土師器 (赤彩含む)、須恵器、縄文土器、磨石、石製模造品、石剣	
SI20 壁溝	(5.02)	0.22	0.13	-	U字	褐灰色	-	
SK21	(0.33)	0.19	0.3	長円	U字	東壁参照	-	
SK22	0.43	0.33	0.05	楕円	皿	断面図参照	土師器	
SK23	0.28	0.25	0.52	円	U字	断面図参照	土師器、縄文土器	
SK24	0.5	0.39	0.77	楕円	U字	灰黄褐色	土師器、須恵器	
SK25	0.38	0.32	0.32	隅丸方	U字	東壁参照	-	
SL26	0.3	0.25	0.02	楕円	逆U字	焼土 (橙色)	-	
SL27	0.4	0.3	0.01	長円	逆U字	焼土 (明赤褐色)	-	
SL28	0.38	0.22	0.02	楕円	逆U字	焼土 (明赤褐色)	-	
SK29	0.55	0.45	0.1	楕円	U字	暗褐色+にぶい黄褐色ブロック 3%	土師器	
SK30	0.16	0.15	0.55	円	U字	灰黄褐色	土師器	
SK31	0.31	0.16	0.39	楕円	U字	灰黄褐色	-	
SK32	0.18	0.13	0.07	楕円	U字	灰黄褐色	土師器	
SK33	0.27	0.26	0.69	円	U字	灰黄褐色	土師器	
SK34	0.14	0.14	0.14	円	U字	灰黄褐色	-	
SK35	0.16	0.14	0.26	円	U字	灰黄褐色	-	
SL36	(0.9)	0.64	0.03	楕円	U字	焼土 (橙色)	-	
SK37	0.21	0.19	0.38	円	U字	灰黄褐色+炭化物微量	土師器、縄文土器	
SK38	0.32	0.3	0.15	円	U字	黒褐色+地山ブロック 5%	土師器 (赤彩含む)	
SK39	0.27	0.25	0.24	楕円	U字	灰黄褐色+地山ブロック 5%+炭化物微量	土師器、縄文土器	
SK40	0.69	0.61	0.1	楕円	U字	断面図参照	土師器、縄文土器	
SK41	0.23	0.2	0.15	円	U字	灰黄褐色	-	
SK42	0.26	0.2	0.39	長円	U字	灰黄褐色	土師器	
SD43	7.8	0.2	0.09	-	U字	断面図参照	土師器	
SK44	0.45	0.31	0.04	楕円	U字	灰黄褐色	-	
SK45	0.36	0.27	0.5	楕円	U字	灰黄褐色+焼土ブロック 3%	土師器	
SK46	1.3	0.4	0.05	不定	U字	暗褐色+地山ブロック 20%	-	南西最深部は 0.62m
SK47	0.5	(0.26)	0.34	長円	U字	灰黄褐色+地山ブロック 30%	土師器、縄文土器	
SK48	0.25	0.23	0.1	円	U字	灰黄褐色+地山ブロック 3%	土師器	
SK49	0.58	0.45	0.04	楕円	U字	褐灰色+地山ブロック 5%	土師器	
SK50	0.28	0.28	0.31	円	U字	褐灰色+地山ブロック 30%	土師器	
SK51	0.23	0.23	0.22	楕円	U字	褐灰色+地山ブロック 5%	縄文土器	
SD52	1.24	0.24	0.22	-	U字	褐灰色+地山ブロック 5%	土師器、須恵器	
SK53	0.9	0.37	0.08	長円	U字	断面図参照	土師器	
SK54	0.27	0.25	0.45	円	U字	褐灰色	-	
SK55	0.27	0.25	0.45	楕円	U字	断面図参照	須恵器	
SK56	0.29	0.25	0.51	楕円	U字	断面図参照	土師器	
SK57	0.29	0.29	0.72	円	U字	断面図参照	土師器	
SK58	0.2	(0.14)	0.1	円	U字	断面図参照	-	
SD59	1.9	0.2	0.08	-	U字	断面図参照	土師器	
SK60	0.42	0.4	0.45	長円	円錐	断面図参照	土師器	
SK61	0.21	0.2	0.15	楕円	U字	灰黄褐色+焼土ブロック 3%	土師器、須恵器	
SK62	0.26	0.23	0.46	円	U字	灰黄褐色+地山ブロック 30%	土師器	円窓付台付壺、プランデークラス形高坏
SL63	0.5	0.3	0.1	長円	逆U字	焼土 (橙色)	土師器、石 (上面)	
SK64	0.25	0.24	0.45	長円	U字	灰黄褐色+焼土ブロック 3%	-	
SK65	1.7	1.3	0.12	不定	皿	灰黄褐色+焼土ブロック 3%	土師器	

主要遺物に示した土師器には、一部弥生土器も含む。

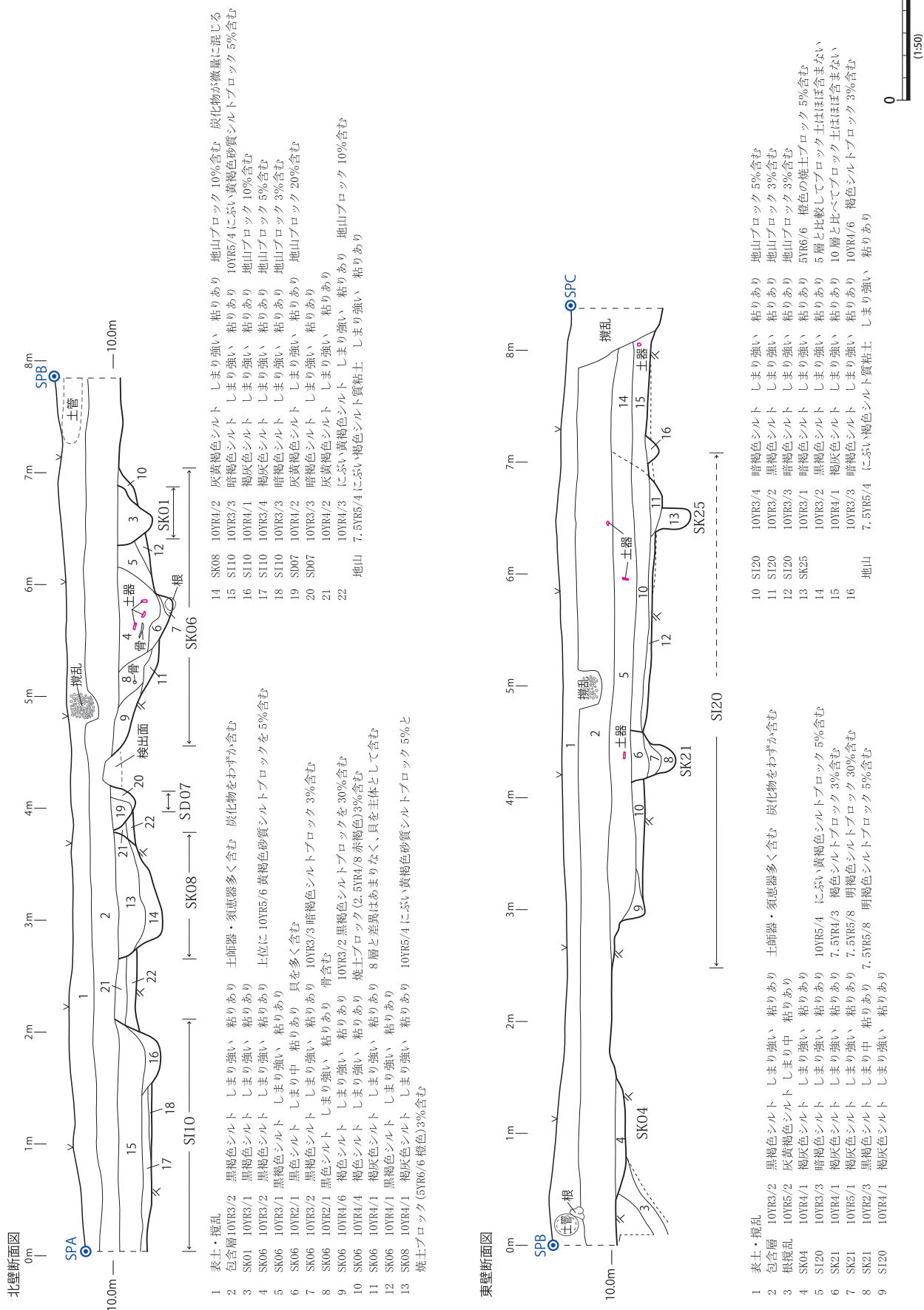


図5 北壁・東壁壁面図

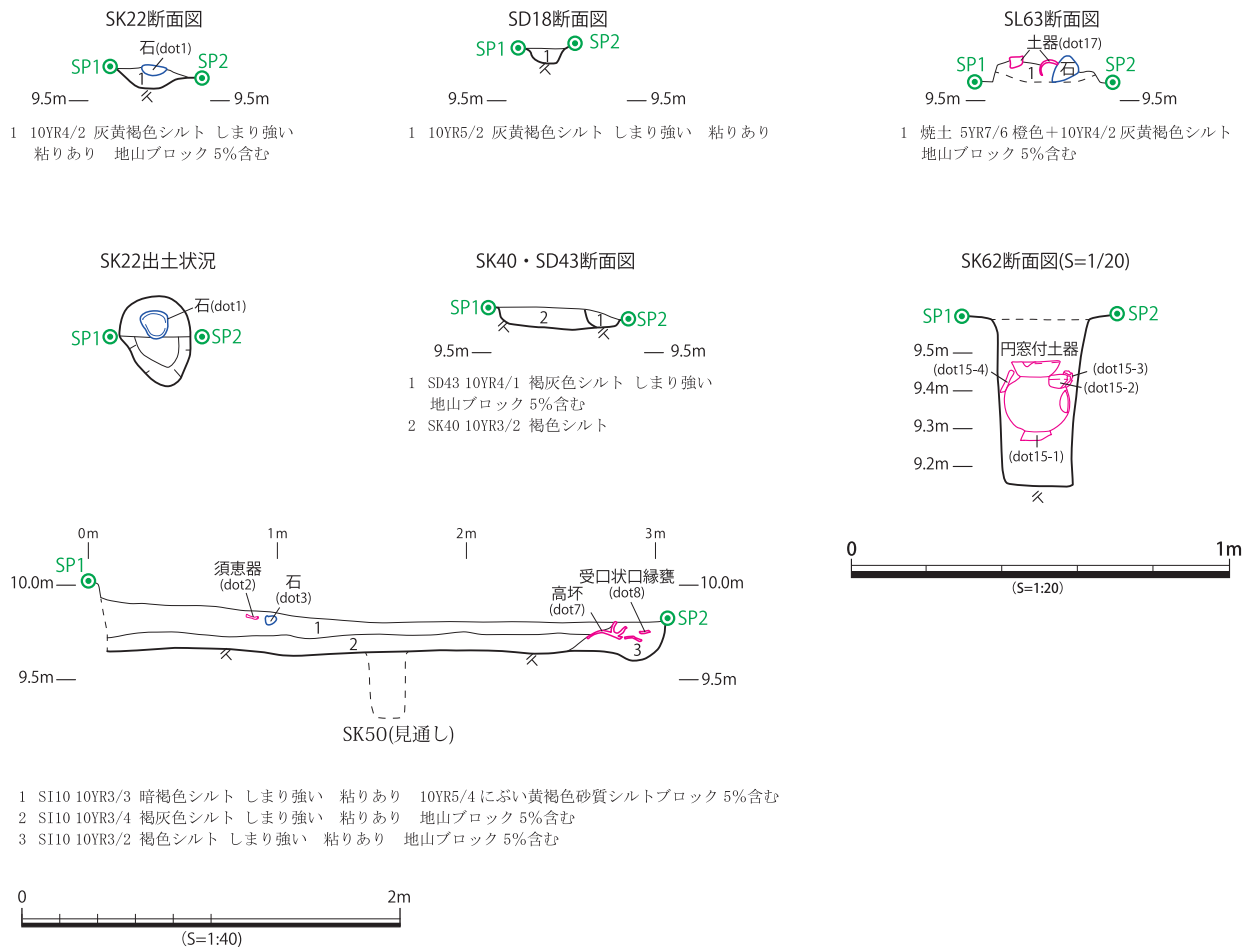


図6 SI10 断面図・その他断面図

認している。壁面付近の埋土を水洗選別したところ、ハマグリ、アカニシ中心で、他にツメタガイ、カキなどの貝類やイワシ類・エイ、ハゼ？やアジかサバなどの魚骨などが含まれる事が判明した。動物骨は、ニホンジカの臼歯・中足骨のほか、イノシシまたはニホンジカの焼けた骨片も含まれる。取り上げた動物骨に人骨が含まれるかは不明である。

SI10 調査区北西部で確認され、調査区外北西へ続く竪穴建物跡。壁溝に切られるように北西-南東方向のSD52を確認したが、北東の壁溝とほぼ同じ軸方向であるため、建替や増築などの可能性もある。調査区西側での立会調査時にも、甕の体部などが出土しているが、関連遺構は削平の影響で確認できなかった。また、被熱痕・焼土については確認できなかった。主柱穴はSK50・51か。

南東の壁溝中央部で土師器(dot6～8)が出土したほか、北西部の埋土の上部で須恵器蓋坏(dot2)が出土している。土師器は、有稜高坏と台付甕、受口状口縁甕でいずれも廻間～松河戸式。須恵器の蓋坏は天井部のみであるが扁平で器壁はやや厚くH-111～H-48号窯式前後か。そのほか、甕の底部・平瓶・甕が出土した。台付甕はくの字甕で頸部～体部のハケが内外面ともに粗い。一括遺物で土師器の移動式竈の焚口のヒレ部、高坏・器台・赤彩を施された壺などが出土している。遺物に若干の時期差があるが、壁溝付近で確認された土師器は4世紀代に溝内がやや埋まった後に廃棄されたと考えられ、須恵器や移動式竈はある程度遺構が埋まった5世紀段階に廃棄されたと考えたい。

第3章 調査の方法と成果

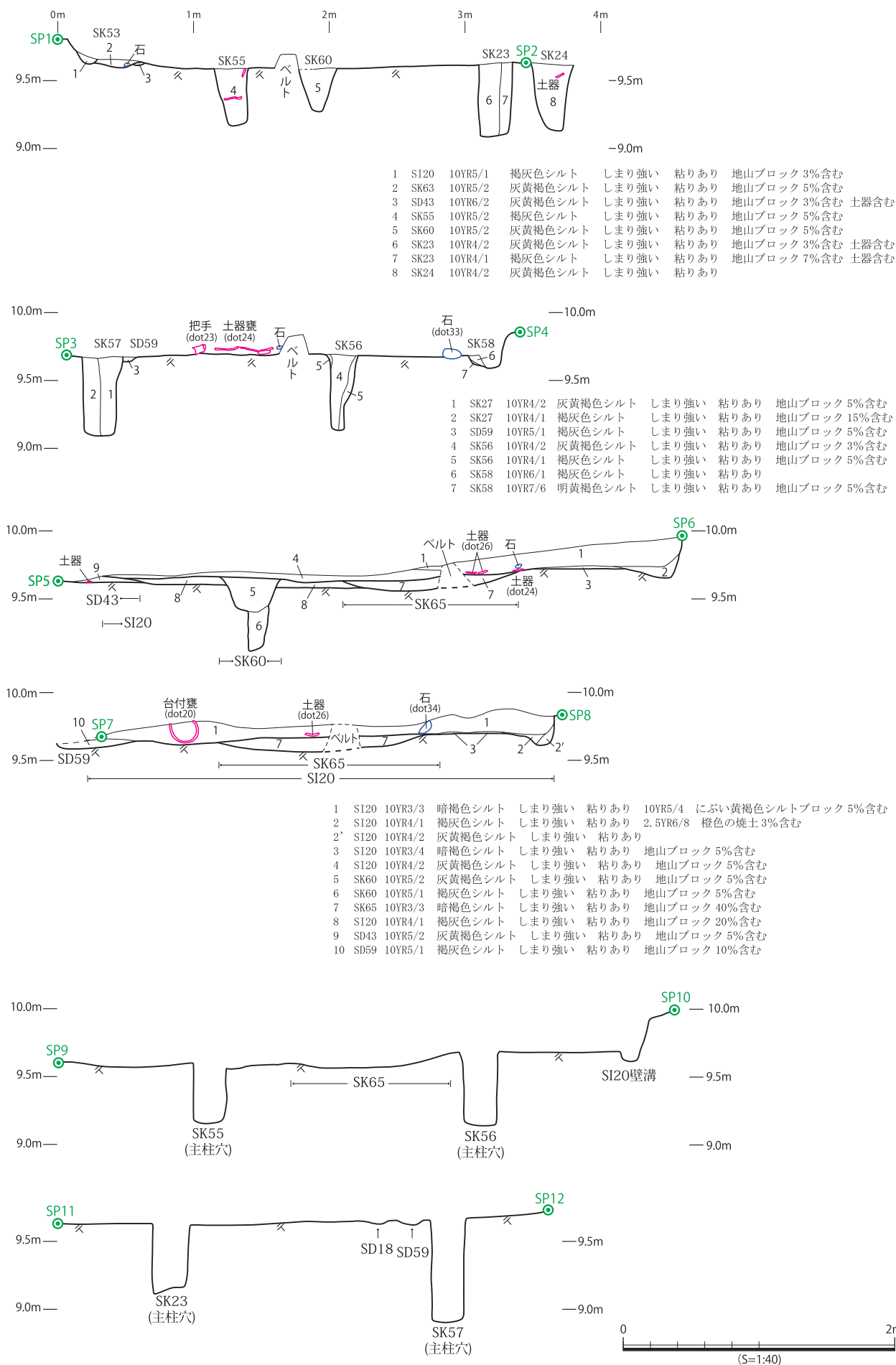


图7 SI20 断面图

SI20 調査区東部で確認され、調査区外南東へ続く竪穴建物跡。調査区東側での立会調査時に南東隅部を確認できたことから、一辺 4.4m の規模と考えられる。壁溝の南西部・南東部については明瞭に確認できなかったが、遺物包含層として掘削した部分に残存していた可能性がある。遺構の南西部で焼土 (SL63) を確認した。ブロック土が混ざった焼土の厚みは 0.1m 程度で、被熱した 0.1 ～ 0.2m 程のチャート製の円礫を伴っており、支脚の用途であった可能性がある。比較的壁際近くに位置しており、地床炉ではなく、遺存状況は悪いもののカマドの可能性もある。主柱穴は SK23・55・56・57 か。

遺構の中央部で土師器の台付甕・壺・高坏・器台・鉢・瓢形壺・ミニチュア台付甕・蓋の把手?、須恵器の高坏・甕・大型甕を確認した。遺物の確認レベルは T.P.9.7m 前後に集中しており、このレベルが生活面であったと考えられる。台付甕は 6 個体以上あり、口縁部はくの字が 2 点、宇田型台付甕 (以下、宇田甕) のように口端部に面やや弱い沈線をもつものが 4 点ある。宇田甕のうち 2 点はハケ目が強く、残り 2 点とくの字甕は外面がハケ後にナデ調整をされている。高坏は、坏部の外面にある突帯が垂下する形式のものであり、これも宇田式と考えられる。甕は土師質と須恵質があり、土師質は底部が、須恵質は把手が残る。また、SK55 から須恵質の把手が出土しているが同一個体ではない。須恵器の中でも一括取り上げのものと SK24 から出土した高坏は、外面中位に 2 条の突帯が 2 組巡らされており、その両側に 2 条の波状文が施される。H-111 号窯式期のものに似ており、別個体で高坏または鉢と思われるものもある。大型壺は器高 28.5cm、胴部径 30.5cm、外面は平行タタキで 5 条の沈線が走るが波状文は確認できない。内面はナデ調整で仕上げられ、口縁部は外反しつつ、平滑に伸びる。口端部は強く折り返される。H-111 ～ H-48 号窯式か。縄文土器の破片も含まれており、底部などである。他に石製品で石剣と鏡を模したとみられる石製模造品が出土している。本遺跡では、調査区から約 60m 西側で過去に石剣が 2 点採集されている。

遺構の時期は遺物から 5 世紀中頃と考えられる。

SI20 に先行する遺構として、西側にこれより大型の約 6m 規模の竪穴建物跡の壁溝 (SD43)・焼土 (SL26~28)、南東部で壁溝 (SD59) を確認したほか、遺物が集中して出土した下層より比較的浅い土坑 (SK65) が確認されたが、いずれも明確に遺構の所属時期を決める遺物はなく、周辺で山中式～廻間式と考えられる遺物も遺物包含層に含まれることから当該時期と考えたい。SI20 の北側に SD07 と SL03 があるが、ここも竪穴建物跡の可能性があり、SL03 の上層で確認した高坏の脚部 (dot04) も廻間式と考えられる。

SK62 SI20 の西側で確認された土坑で、先ほど述べた SD43 に関連する竪穴建物跡に付随する可能性もある。円柱状の土坑で中位より円窓付台付壺が正位の状態で埋められていた。円窓は南東方向を向き、西側には 2 片のブランデーグラス形高坏の坏部、東側にはくの字状口縁の小型甕の口縁部が添えられていた。

円窓付台付壺は口縁部・脚部の一部を欠く。全体的に外面は上半がナデ調整、下半がケズリ後ハケ調整か。円窓の対面側に 7 ～ 8mm の不定円形の穿孔がみられ、焼成後、外面からの所作で、接合すると思われる破片が内部に含まれていたが、破断面は摩耗しており、理由は不明である。遺構の時期は、遺物から山中～廻間式と考えられる。



SK06 完掘 (南東から)



SI10 ベルト断面 (南から)



北壁断面 (南から)



SI20 遺構検出状況 (北東から)



SI20 遺物出土状況 (北東から)



SK62 遺物出土状況 (南から)



完掘状況 (南東から)



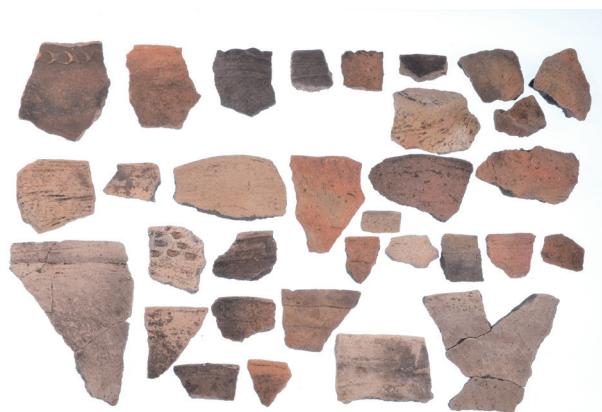
調査区遠景 (北から。奥の森が熱田神宮)



石製品



貝・動物骨・骨製品



SK06 集合写真



SI10 集合写真



SK62 集合写真



SI20 集合写真



SI20 出土 須恵器甕



SI20 出土 須恵器高坏など

報告書抄録

ふりがな	たまのいいせきだい 1 4 じはくつちょうさほうこくしょ							
書名	玉ノ井遺跡第 14 次発掘調査調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	樋田泰之（編著）							
編集機関	名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護課							
所在地	〒 461-0001 愛知県名古屋市東区泉一丁目 1 番 4 号 Tel：052-253-9279 Fax：052-972-9217							
発行機関	名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護課							
所在地	〒 461-0001 愛知県名古屋市東区泉一丁目 1 番 4 号 Tel：052-253-9279 Fax：052-972-9217							
発行年月日	西暦 2025 年（令和 7 年）3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
たまのいいせき 玉ノ井遺跡	名古屋市熱田区 玉の井町 920 番の 一部	23100	12－10	35° 7′ 49″	136° 54′ 25″	2024 年 9 月 17 日～ 2024 年 9 月 27 日	70	教会建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
たまのいいせき 玉ノ井遺跡	散布地	縄文～古墳		土坑・竪穴建物跡		縄文土器、石剣、 土師器、須恵器、 移動式竈、石製模 造品	第 14 次調査	
要約	第 3 次調査の南東約 40m の地点の調査である。第 3 次調査で確認された土器棺墓・土坑墓と同時期の元刈谷式期～稲荷山式期の土器を含む土坑が 1 基確認され、貝類・動物骨・魚骨も含まれる。また、少なくとも 2 棟の竪穴建物跡が確認され、宇田式前後の土師器、5 世紀代の須恵器が確認された。埋土より甕、移動式竈、鏡型の石製模造品、石剣が出土している。							

玉ノ井遺跡第14次発掘調査調査報告書

2025年3月31日発行

発行 名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護課
〒461-0001 愛知県名古屋市東区泉一丁目1番4号
Tel: 052-253-9279

印刷 株式会社中部日本広告社